

児童期・青年期における友人関係の発達と精神的健康

—児童期・青年期に関する臨床心理学的考察—

福岡市障がい者更生相談所 佐藤倫子

要 約

本研究では、友人に対する意識の性差と発達的变化を明らかにし、それら友人に対する意識と精神的健康との関連を導き出すことを通して、子どものより健康なこころの状態の実現について検討した。友人に対する意識の性差は、発達段階により異なることがあきらかになった。小学生で性差の見られた項目は、中学、高校でも継続して性差があり、発達にしたがって性差のある項目が増えていた。つまり友人に対する意識の性差は、高校生でピークになる。性差は女子が男子よりも友人に対しより肯定的な意識をもつ傾向にあった。友人に対する意識と精神的健康との関連においては、友人に対する意識が影響を及ぼす精神的健康要因と、及ぼさない要因があることがあきらかとなった。及ぼさない要因は身体症状がほとんどであり、身体化現象の複雑性がうかがえた。友人に対する意識が精神的健康に与える影響は、小・中・高及び性別により異なっていた。友人関係に最も性差のあらわれるのは高校生であった。しかしその友人関係の影響が最も精神的健康に及ぶのは、中学生の時期だった。つまり、友人に対する意識における性差が精神的健康にそのまま影響するわけではなく、友人に対する意識における性差を含めた友人関係のありようが、精神的健康に影響を及ぼしているのである。子どもの呈する症状には複雑な要因が絡んでおり、周囲がどのように子どもの姿を受け止め、どのようにあろうとするかが問われている。

キーワード：精神的健康，友人関係，発達的变化

はじめに

子どもたちの人とかかわり方は、自分の子ども時代とはまったく違うように感じることもある。今子どもたちのこころは、いったいどのような中を揺らいでいるのであろうか。本当の自分を求めがきながら、子どもは何を感じ、何を思い生きているのだろうか。

人間は生物的・心理的・社会的に統合された存在であり、特に発達過程にある子どもは、よりさまざまなものの影響を受けやすい、敏感な存在である。教育現場におけるさまざまな状況が大きな社会問題となる中、周囲の関心は問題行動ばかりに行きがちである。しかし本来望まれているのは、問題行動を起こすことなく児童生徒が健やかに成長していくことである。

【問題】

1) 健康の概念

健康とは、積極的に望ましい状態であり、病気ではない状態ではない。1946年に設立された世界保健機構 (World Health Organization, WHO) では、「健康とは身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病や虚弱が存在しないということだけではない」と定義されている。しかしながら、実際にWHOの定義するような身体的・精神的・社会的に良好な状態を保ち続けることは、とても困難なことである。

時代の変容は価値観の変化を生み、それにともない健康の概念は変化してきている。健康の概念を定説として語ることは難しい。しかし未来に向けた健康の概念は、人間と社会と調和をはかりながら心身ともたくましく生きぬく方向性を明確に

示すことを必要としている⁽²⁾。

健康の定義は多数存在するものの、身体的・精神的・社会的という3つの側面を抜きに健康を語ることはできないだろう。健康とは病気の反対の言葉ではなく、もっと広い意味をもっており、単に身体的健康のみでなく、精神的にも健康であること、つまりは総合的、総括的に健康であることが求められている。また社会的という側面、社会の一員であることが同時に重視されている。

2) 友人関係

子どもたちの友人関係は、変化したと言われる。現場の教師や大人たちが指摘しているような子どもたちの無気力状態や無気力傾向も、友人関係にも広がっているといわれる(笠井他, 1995)。本来友人関係は、夫婦、親子、指定、同僚関係とは異なり、利害関係も上下関係もない人間関係であり、本来的には安心して自分をだすことのできる関係である。しかし、昨今の児童生徒は、表面的な親密さや楽しさを求め、互いに傷つくことを恐れ、形式的な円満な友人関係を求めながら、関係が深まることを避ける傾向が指摘されている(栗原, 1989; 岡田, 1995; 千石, 1991など)。

友人関係は中学生の代表的な学校ストレス場面の一つとしてみなすことができる(岡安他, 1992)。また笠井らは、青年期における友人関係の発達的变化を検討し、青年期の友だちとのつきあい方が「友達と選択的にかかわろうとするか」という『友達とのかかわり方に関する姿勢』と、「人を選択し限定した友達とかかわろうとするかー広い範囲の友達とかかわろうとするか」という『自分がかかわろうとする相手の範囲』の二つの次元を導き出している⁽⁶⁾。二つの次元により、青年期の友だちとのつきあい方を4パターンに分け、友だちとのつきあい方がまず浅いつきあい方から深いつきあい方へと『友達とのかかわり方に関する姿勢』は変化し、『自分がかかわろうとする相手の範囲』の変化が起こることを明らかにしている。また榎本(1999)によると、友人に対して「ライバル意識」が中学生で強く、「不安・懸念」

が中学高校で強く、「独立」の意識が大学生で強い。

友人関係には、(数多くの研究でも示唆されているように、⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾性差が見られる。落合・佐藤(1996)によると、中高生においては性差がみられるものの、大学生ではみられず、年齢が増すにつれて性差がなくなる。中学生で男子に多く女子に少ない「浅く狭くかかわるつきあい方」は、高校生では女子に多く男子に少なくなる。また女子は、中学生では「深く広くかかわるつきあい方」が男子に比べ多く、高校生では「深く浅くかかわるつきあい方」が男子に比べ多くなる。また友人に対して、男子は女子に比べ「ライバル意識」「葛藤」を強く感じており、女子は男子に比べ「信頼・安定」「不安・懸念」を感じているとされる(榎本, 1999)。

以上のように、青年期の友人関係については数多くの研究がなされている。しかし児童期以前の研究は少ない。人間の発達は連続的過程であり、友人関係も同様である。したがって児童期を含めた友人関係のありようを明らかにしていくことは重要であると考え、本研究の対象とする。

【目的】

精神的健康のありようの変化は、社会における人間関係の変化を同時にあらわしているとも言える。人に対する意識や信頼感は、時代とともに変化しているように思われる。児童生徒は、家庭、地域、学校などにおいて、さまざまな人間関係を抱えながら生きている。その中で特に友人関係は、生活の大部分を学校で過ごす児童生徒にとって、心理的にも重要な位置を占めていると考えられる。

そこで本研究においては、『友人に対する意識や実際の友人関係は精神的健康と関連があるのではないか』という仮説のもと、1) 友人に対する意識の性差と発達的变化、2) 友人に対する意識(友人関係)と精神的健康との関連を、小・中・高にそれぞれについて明らかにし、子どものより健康なこころの状態の実現について検討することを目的とする。

調査：2004年11～12月に鹿児島県内において行った『心の健康アンケート』調査を用いた。調査対象・調査対象地区は、Table I-1・2の通りであった。鹿児島県全域を市部・郡部・離島に分け、地域性を考慮し、人口比率を参考にして対象学校選定した。鹿児島県都市部、郡部、離島部の対象校、および対象児童生徒は、すべて同一地区、同一学年、同一学校であった。

調査内容および調査方法：日本学校保健会(1982)の施行した児童生徒の「心の健康」に関する調査と全く同一の30項目に、項目「親友の有無」と「親友の内容」を付加した。アンケートは、無記名、直接回答で行った。

調査の実施と調査機関：

企画・実施

鹿児島純心女子大学大学院 人間科学研究科 協力
鹿児島県教育委員会保健体育課

Table I-1 学年別回収率

	男	女	不明	合計
小6	204	214		418
小2	224	188	1	413
高2	263	192		455
合計	691	594	1	1,286

Table I-2 地区別調査対象校

	小	中	高	(普通科)	(職業科)	合計
市部	3	3	3	(2)	(1)	9
郡部	2	2	3	(1)	(2)	7
離島部	1	1	2	(1)	(1)	4
合計	6	6	8	(4)	(4)	20

【結果】

1) 友人に対する意識の性差と発達の変化

友人に対する意識には性差があると考え、t検定を行った (Table1)。項目b・c・g「話の話題がたくさんあって楽しく、自分の知らないことを教えてくれる」「趣味や好みが同じで性格が似ている」「言いたいことが言い合え、素直につきあえる」では、小中高すべてにおいて有意差は認め

られなかった。特に項目gは、t値も低く、ほぼ同様の数値であった。その他の項目でも、男子が女子よりも有意に高いものはなく、全体的に女子が男子よりも高かった。

小学生においては、項目e・f「何かをするときに一緒に行動でき、いつも一緒にいる」「何かをするときに一緒に行動でき、いつも一緒にいる」において、女子が男子より高かった。その他の項目についても、有意ではないが女子が男子より高い傾向にあった。

中学生においては、項目a・d・f・h・j「困ったときに助けてくれたり、お互いに協力できる」「自分を今よりも、向上させてくれる」「何かをするときに一緒に行動でき、いつも一緒にいる」「お互いにとって役立つことができ、頼れる」「悩みや心配ごとをうちあけることができたり、何でも話してくれる」において、女子が男子より高かった。その他の項目でも女子が高い傾向にあった。

高校生においては、10項目のうちの7項目a・d・e・f・h・i・j「困ったときに助けてくれたり、お互いに協力できる」「自分を今よりも、向上させてくれる」「よく気がついて、相手の気持ちを思いやってくれる」「何かをするときに一緒に行動でき、いつも一緒にいる」「お互いにとって役立つことができ、頼れる」「自分を必要としてくれたり自分の性格や気持ちを大事にしてくれる」「悩みや心配ごとをうちあけることができたり、何でも話してくれる」において、女子が男子よりも高かった。

発達的に見ると、性差のあった項目は小学生ではe・f、中学生ではa・e・f・h・j、高校生ではa・d・e・f・h・i・jであった。小学生で性差の見られた項目は、中学、高校でも継続して性差があり、発達にしたがって性差のある項目が増えていた。

2) 友人に対する意識と精神的健康との関連

「友人の内容」10項目について、小・中・高別にクラスター分析 (ward・平方ユークリット距離) を行い、グルーピングを行った。グループサイズ、信頼性から2グループを採用した。平均

値の高いグループをHグループ、低いグループをLグループとした。全てにおいて平均値には有意差がある。

抽出した2つのグループH（友人に対する期待が高い）とL（友人に対する期待が低い群）の精神的健康のありようの比較を行った。基本30項目と親友の有無を問う付加項目b「心から親しいと思える友人がいますか」についてクロス集計（ χ^2 検定、片側）を行った。性別による違いがあると考え、男子、女子それぞれについても分析を行った。小・中・高それぞれの結果は、Table2の通りである。

項目9・17・20・21・22「朝起きるのがつらいと思うこと」「こわい夢をみること」「めまいや立ちくらみがすること」「手足のしびれや冷たくなること」「下痢や便秘になること」では、全てにおいて有意な差は示されなかった。反対に、項目1・3・30・b「毎日の気分がよくない」「学校での生活が楽しくない」「悩みや心配事の相談をしたことがある」「心から親しいと思える友だちがいない」においては、小中高それぞれの全体、性別すべてにおいて有意差が認められた。項目30のみLグループよりHグループの方が高くなっており、その他の3項目ではLグループの方が高かった。また項目10では小・高においてすべてでLグループの方がHグループよりも高く、中学

生でも男女それぞれにおける有意差は認められなかったものの、全体では小・高と同様の差が認められ、Lグループの方がより多かった。

全体的にLグループの方がHグループより多くの症状を呈していた。Hグループにおいては、相談事をしたことのある人がLグループに比べ多いことがあきらかとなった。性別でみると、男子においてのみ有意差のあった項目は、中学生では項目6・12（H<L）、高校生では項目29（H>L）であった。女子においては、小学生では項目6・11・12・16・18（6・11・12・18；H<L，16；H>L）、高校生では項目5・12・24・26（H<L）であり、中学生ではなかった。

【考察】

1) 性差と発達的变化からみた友人に対する意識のありよう

性別により友人関係のありようを比べてみると、小中高と経るごとに性差の表れる項目は増えることが明らかとなった。これは、友人関係の性差は高校生でピークになるという落合・佐藤の先行研究と一致していた⁶⁾。また本研究では、性差の生じた項目は、そのまま高校生まで性差が続いていることが示唆された。小学生であきらかとなった性差が、高校生に至るまで続くのである。これは女子における友人に対する意識の基礎や発達的な

Table 1 性別による友人の内容各項目の平均値とt検定

「今のあなたの友だちはどんな友だちですか」 各項目	小6			中2			高2		
	男	女	t値	男	女	t値	男	女	t値
a 困ったときに助けてくれたり、お互いに協力できる	3.76	3.88	1.40	3.51	3.93	4.66**	3.69	4.20	6.07**
b 話の話題がたくさんあって楽しく、自分の知らないことを教えてくれる	3.93	4.11	1.87	3.83	3.90	0.75	3.84	4.00	1.79
c 趣味や好みが同じで性格が似ている	3.24	3.44	1.93	3.31	3.41	1.11	3.28	3.40	1.65
d 自分を今よりも、向上させてくれる	3.27	3.32	0.51	3.21	3.27	0.65	3.30	3.60	3.20**
e よく気がついて、相手の気持ちを思いやってくれる	3.27	3.60	3.10**	3.24	3.55	3.11*	3.34	3.87	5.68**
f 何かをするときに一緒に行動でき、いつも一緒にいる	3.94	4.10	1.43	3.72	4.10	3.95**	3.66	4.02	3.71**
g 言いたいことが言い合え、素直につきあえる	3.71	3.72	0.08	3.65	3.64	-0.16	3.65	3.71	0.62
h お互いにとって役立つことができ、頼れる	3.70	3.81	1.02	3.46	3.67	2.06*	3.50	3.85	3.82**
i 自分を必要としてくれたり自分の性格や気持ちを大事にしてくれる	3.22	3.39	1.61	3.24	3.41	1.67	3.30	3.76	5.05**
j 悩みや心配ごとをうちあけることができたり、何でも話してくれる	3.14	3.62	4.23**	3.27	3.75	4.39**	3.32	3.69	3.70**

注) ※：p<.05 ※※：p<.01 ※※※：p<.001

過程をあらわしているようにも思える。

性差のあらわれていった友人に対する意識の内容としては、小学生では、よく気がついて相手の気持ちを思いやってくれるという「敏感さ」と、悩みや心配ごとをうちあけることができたり何でも話してくれるという「自己開示」の意識であった。その二つに加え、中学では、困ったときに助けてくれたり、お互いに協力できる「協力」、何かをするときに一緒に行動でき、いつも一緒にいる「共行動」、お互いにとって役立つことができ頼れるという「相互依存（協力）」が加わる。さらに高校生では「自分を今よりも、向上させてくれるという「自己向上」、自分を必要としてくれたり自分の性格や気持ちを大事にしてくれるという「尊重」が加わり、全10領域中7領域において女子が男子よりも友人に対し高い期待を抱いていることが示唆された。

性差がどのようにあらわれていくかを考えてみる。中学において初めて性差のあらわれる3項目についてみると、「協力」は、女子では中学生で

小学生より期待が高くなっている。「共行動」は、男子では中学生で小学生よりも期待が低くなっており、女子における変化はない。「相互依存（協力）」は、男子も女子も中学生で小学生よりも低くなっていた。高校生において性差の初めてあらわれる2項目について見ると、「自己向上」「尊重」共に、女子において高校生が中学生より高くなっており、男子は変化がみられない。

女子における友人に対する意識は、男子に比べ小学生の時点で「敏感さ」「自己開示」という意識をより強く持っており、中学生になると「共行動」の意識が高まる。さらに高校生では「自己向上」「尊重」の意識の高まりを見せる。

男子においては、友人に対して全体的に女子よりも期待の低い様相を呈している。男子の場合、中学生になると「協力」、「共行動」、「相互依存（協力）」において意識が低まっている。高校生になると「協力」は高くなり、「依存」はさらに低くなる。男子が女子に比べ強く抱くという友人に対するライバル意識¹⁾も、関係しているように思

Table 2 友人に対する意識の違いによる精神的健康各項目

質問事項	小学生			中学生			高校生		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
1 毎日の気分がよくない	※※※※	※※※※	※※※※	※※※	※※※	※※※※	※※	※※※	※※※※
2 健康に対する自信がない				※※※	※	※※※※	※		※※
3 学校での生活が楽しくない	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※	※※※※	※※※※
4 家での生活が楽しくない				※	※	※※			※
5 将来への心配がある		※	※					※	
6 疲れやすいと思うこと		※		*					
7 夜眠れないこと		※※	※	※※	※	※※※			
8 なんとなくさびしいと思うこと		※	※						
9 朝起きるのがつらいと思うこと									
10 学校へ行きたくないと思うこと	※※	※※※	※※※※			※	※※	※	※※※
11 食事をしたくないと思うこと		※							
12 すぐ不安になること		※※		*				※※	
13 何をしても楽しくない		※	※※	※		※	※	※	※※
14 何のために生きているのかわからないと思うこと		※※※※	※※※※	※	※	※※※			※
15 死んでしまいたいと思うこと	※	※※	※※※	※※	※※	※※※		※	※
16 悩みや心配ごと		※							
17 こわい夢を見ること									
18 動悸がしたり胸が苦しくなること		※							
19 腹痛や頭痛がすること	※	※							
20 めまいや立ちくらみがすること									
21 手足のしびれや冷たくなること									
22 下痢や便秘になること									
23 体の病気への心配がある									
24 心の病気への心配がある		※※※	※※					※※	
25 父母と意見が合わないこと				*		*			
26 早く大人になりたいと思う		※	※※					※	
27 家を出て遠くへ行きたいと思う		※	※※		※	※※		※※	※
28 親に反抗したい			※						
29 先生に反抗したい									*
30 悩みや心配事の相談をしたことがある		*	***	*		****	****	**	****
b 心から親しいと思える友だちがいない	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※	※※※※

注1) ※: p<.05 ※※: p<.01 ※※※: p<.001 ※※※※: p<.0001
 注2) ※※※※: H<L * * * * *: H<L

われる。

男女別に友人に対する意識の発達的变化をみると、女子は男子よりも徐々に高くなり、男子は変化しない、あるいは徐々に低くなるといったものが多くを占めていた。本研究において設定した10領域のうち7領域に及ぶ。全体的にも、女子が男子よりも意識を高く持っていた。しかし、両者には性差のみられなかった残り3項目「情報」「類似」「真正さ」の共通性もある。また、落合・佐藤（1996）によると、性差は大学生ではみられず、年齢とともに無くなるという。友人に対する意識の発達的变化は、性別により歩む道は少し異なることはあっても、最終的には同様の意識に至ると言えるだろう。

2) 友人関係と精神的健康

友人に対する意識のありようにより分類したグループでの分析においては、心から親しいと思える友だちがいる人は、友人の内容（友人に対する意識）を問う10項目でも、友人を肯定的にとらえていることがうかがえた。当然のこのようにも思われる。しかし細かくみていくと、親しい友だちがいながらも、友人について肯定的な意識を持ち合わせていない児童生徒が多数いることがわかった。それは友人に対する期待が低いグループのうち、小学生では約67%、中学生では約59%、高校生では約55%に及ぶ。また逆に、友人がいなしながらも、友人に対し期待を抱き、肯定的な意識を持っている児童生徒もいた。それは肯定的な意識を持つグループのうち、小学生では約5%、中学生・高校生では約10%であった。（以下、便宜的に本文中のHグループを肯定的なグループ、Lグループを否定的なグループとあらわす。）心から親しいと思える友人がいないと認識しながらも、現在の友人に対して肯定的にとらえているのである。その理由として、現在の友人関係に不満はないが心から親しいとは感じられない、あるいは友人に対する期待度がもともと低いために否定的にはならない、現在の友人との仲に満足しながらもさらに仲良くなりたいなどの期待を持って

いる、などが考えられる。どのような理由にしても、どこか孤独感や空虚感のようなものが感じられる結果でもある。

友人に対する意識が影響を及ぼす精神的健康要因と、及ぼさない要因があることもあきらかとなった。また、友人に対する意識が精神的健康に与える影響は、小・中・高及び性別により異なることがわかった。つまり、友人に対して同様の意識を有しているとしても、その個人に対する影響は異なってくるということである。先述の結果2)からもわかるように、友人関係の性差は高校生でピークになる。その性差は女子が男子よりも友人に対しより肯定的な意識をもつ傾向にある。言い換えれば、女子の方が男子よりも友人関係により依存的であると表現することができる。

しかし本研究において、友人関係のありようにより精神的健康状態に性差が最もあらわれる時期は、高校生ではなく中学生であった。つまり友人に対する意識における性差の影響を最も受けやすいのは、中学生であることがわかる。そのことから、高校生の女子は男子に比べ多くの点で友人に対し期待を抱き信頼を寄せているものの、依存することなく過ごしていることがうかがえる。高校生女子のありようから考えると、中学生女子における友人関係は、彼女たちにとって大きな影響要因となっていることがわかる。友人に対し中学生に比べて期待を寄せている高校生女子よりも、精神的健康に及ぼす影響は大きいのだ。その理由は、中高生において性差のあらわれていた各項目内容を見ると、よりあきらかになる。高校生においてのみ性差の認められた項目は「自分を今よりも、向上させてくれる」「自分を必要としてくれたり自分の性格や気持ちを大事にしてくれる」の2つであった。この2つの項目は、自立のための信頼関係をあらわしているように思われる。友人関係の発達の最終段階はこの2項目であり、その過程で揺れている中学生女子の姿が浮かぶ。「悩みや相談事をしたことがありますか」において唯一有意差があらわれなかつたことも、中学生女子の友人に対する信頼感の揺らぎがうかがえる。

友人に対する意識の肯定的なグループが否定的なグループよりも症状を呈していたのは、中学生男子における「疲れやすいと思うこと」「両親に反抗したいと思うこと」の2項目であった。これは一見疑問を抱いてしまう結果でもある。しかし榎本（1999）によると、男子は女子に比べ「ライバル意識」「葛藤」を強く感じており、女子は男子に比べ「信頼・懸念」「不安・懸念」を感じているとされている。中学生男子が小学生男子に比べ友人に対する期待が低い傾向にある理由の1つであるとも考えられる。友人関係に対する意識が肯定的であるか否かだけでは、精神的健康状態ははかれないのだ。これは友人関係だけでなく、その他の影響要因も含め考えていく必要性を示唆している。男子において友人に対するライバル意識や葛藤が女子に比べ強いと考えると、疲れやすいことや親に反抗したいという気持ちになることが多いのも理解できる。同時に、友人関係に対して否定的な児童生徒は、そのライバル意識や葛藤を持ち合わせていない、もしくはその感情を、友人に対する否定的な意識として表現しているのではないだろうか。また親に反抗したいという感情は、必ずしも精神的に健康でないことをあらわすのではなく、反抗したい気持ちになることを表現できるという点で、むしろ精神的に健康な状態に近いと考えられる。

友人に対する意識における性差と、精神的健康状態における性差のあらわれ方は一致しない。友人関係に最も性差のあらわれるのは高校生であった。しかしその友人関係の影響が最も精神的健康に及ぶのは、中学生の時期だった。つまり、友人に対する意識における性差が精神的健康にそのまま影響するわけではなく、友人に対する意識における性差を含めた友人関係のありようが、精神的健康に影響を及ぼしているのである。友人関係の発達のありようがさらに信頼のおけるものとなると同時に、本研究における仮説がさらに後押しされる結果となった。

一方、今回の分析において、友人に対する意識が影響を及ぼすとは認められなかった項目には、

「朝起きるのがつらいと思うこと」「こわい夢をみること」「めまいや立ちくらみがすること」「手足のしびれや冷たくなること」「下痢や便秘になること」があった。身体的な症状を問う項目が中心であった。身体症状に及ぶ要因とは、決して一つのもので語るこのできないものであることがうかがえた。

【展望】

先述したように、友人関係は人間関係の1つの基礎となる。しかし子どもが友人よりも先に接する、さらなる基礎となるのは、家族・親戚関係である。しかし親戚や地域との関係が薄れてきた現在、家庭の担うものが大きくなりすぎてしまったようにも感じる。血縁にも地域社会にも、かつてのような協力体制はないのだ。児童生徒の精神的健康を支えるものとして、今、どのようなものが考えられるであろうか。

誰もが、自分一人ではどうしようもできないような状況に陥ることがある。どうしたらいいのだろうという感情さえも、意識されなくなってしまいうこともある。意識化することなく、症状を呈することも少なくない。現代の子どもたちは、いつも過ごす家庭や学校だけでは救われなくなってきている。

人的なものを含め、どのような資源があったとしても、どのように用いるかで毒にも薬にもなる。ただ、子どものために社会が変化することの大切さを、ここでは述べておきたい。社会的に子どもの問題が取りざたされるようになって久しい。何もせずに「問題だ」と言っても何も変わらない。大人が変わらなければ、子どもは変わらない。

忘れてはならないのは、最も大切なことは精神的に不健康状態に陥らずに過ごせるような『予防』のための日々のありようである、ということだ。それは、悩まずに過ごすことを意味しているのではない。目の前の出来事と向き合い、悩みながらも、心を失わないことである。悩める力こそ、生きていく力とも言える。

本研究において、発達段階によるさまざまな違

いが明らかとなった。同時に、児童生徒の症状に、内なる声が秘められているであろうこともうかがわれた。私たち大人にできることは、日々の出来事に、子どものこころの動きを感じることである。子どもの発達に大人が応じることができれば、子どもはさまざまなことへ気づいていくのではないだろうか。子どもは時代を映す鏡であると言われる。それは同時に、子どもが大人の鏡であることをあらわしているように思う。大切なことは、大人が時に、子どもの鏡になるということである。子どものこころを映し出す鏡として、子どものこころに日々丁寧にかかわることができたとき、子どもは精神的な成長へと向かっていくだろう。

日々の「小さな出来事」と言われるような出来事に目を向けること。それは、心理臨床家が誰かの気持ちに心を寄せることと、どこか似ているような気がする。日々の小さな積み重ねこそが、人を救うのかもしれない。その際、相手の今いる世界（発達段階）を理解しておくことの重要性が、本研究を通して感じられた。その世界とは、年齢

や性別だけで判断されるものではなく、目の前にいる一人の存在に心を寄せることから感じられてくるものではないだろうか。

付記

本論文作成にあたりご指導頂きました久留一郎先生はじめ、支えていただきました全ての方々に心より感謝申し上げます。

【参考・引用文献】

- (1)榎本淳子 (1999) : 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190
- (2)笠井隆久・村松健司・保坂亨・三浦香苗 (1995) : 小学生・中学生の無気力感とその関連要因 教育心理学研究, 43, 424-435
- (3)河合隼雄 (1983) : 子どもと教育を考える2 大人になることのむずかしさ—青年期の問題— 岩波書店
- (4)長尾博 (1999) : 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究, 47, 141-149
- (5)落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達のつきあひ方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65
- (6)佐藤倫子 (2006) : 児童生徒の精神的健康に関する臨床心理学的健康—「20年の継時的変化」と「友人に対する意識との関連」に着目して— 鹿兒島純心女子大学大学院修士論文

Development of Friendships and Mental Health on Childhood and Adolescence

Abstract

This paper defined on consciousness to friend of the different based on sex and development, and considered better condition of children's Mental Health. The different based on sex of consciousness to friend is different from each of a developmental stage. The different based on sex of consciousness to friend in an elementary schoolchild are continue both in a junior high schoolchild and in a high schoolchild. The different based on sex of consciousness to friend are growing. In other word, The different based on sex of consciousness to friend has passed its peak in high schoolchild. Girls are more affirmative to friend than boys. In the relations between development of friend relationship and mental health, There are points is influenced by consciousness to friend and points isn't. Most of the point which isn't influenced by consciousness to friend are physical symptoms. This was guessed that physical symptoms are complicated. Influences of consciousness to friend to mental health vary according to the development stage and the different based on sex. But the influences are greatest in stage of junior high schoolchild stage. In short, The different based on sex of consciousness to friend directly don't influences mental health. Mental health is influenced by state of friend relationship contains the different based on sex of consciousness to friend. The symptoms are given by children

are connected with complicated point. So, It is important that how adults think about children, and how live.

Key Words : Mental Health, Friend Relationship, Developmental Change